

大掃除と孤立死

掃除と片づけ、普段もある。年末の大掃除の度、居住空間をじっくり保つには、いかに気力が必要か痛感する。

今夏、お手本にしていとと思う人に会った。取材で訪ねた91歳の女性である。兵庫県芦屋市で、高齢者の多く住む集合住宅に一人暮らしをしている。

居室に案内された時、じく自然に敬意を抱いた。掃除と整理整頓が行き届き、写真など思い出の品が適度に飾られ、居心地のよい温かい雰囲気を感じ出している。介護保険などを利用し、上手に外からの助けを借りれば、この年齢でも自立した生活は十分できると教えられた。

一方で、誰にも気づかれず孤独死する人が後を絶たない。問題の本質は、他人の関わるのを拒否する孤立した生き方に

ある。遺品整理業の草分け、キーパーズの吉田木一社長はそう考える。

亡くなってしまって誰にも気づかれず、遺体の腐敗臭で周囲が騒ぎ始める。そんな現

場の後始末を数多く手がけてきた。

孤立した生活はどんどん乱れていく。汚れは汚れたまま、「ゴミは捨てられず、

電化製品の故障は放置……。

吉田さんの新著「孤立死」(扶桑社)に挿入された何枚かの写真は、不健康な暮らしひの帰結を見せつける。

最近、気になるのは「初期のオタク世代」という。60歳過ぎの孤独死でも、アニメやアイドルのポスターを貼った自室が現場ということが時々ある。新著の副題は、「あなたは大丈夫ですか?」である。

〈浜田陽太郎〉